

中西 弘樹<sup>1</sup>・久保田 信<sup>2</sup>・松本 敏郎<sup>3</sup>・伊藤 正一<sup>4</sup>：

ワニグチモダマ *Mucuna gigantea* (Willd.) DC. (マメ科) の種子の日本本土への漂着

Hiroki NAKANISHI<sup>1</sup>, Shin KUBOTA<sup>2</sup>, Toshiro MATSUMOTO<sup>3</sup> and Shoichi ITO<sup>4</sup> : Seeds of *Mucuna gigantea* (Willd.) DC. (Leguminosae) drifted ashore in Japanese mainland

ワニグチモダマ *Mucuna gigantea* (Willd.) DC. はマメ科の常緑のつる性木本植物で、その分布は一般に東南アジアを中心に西はインド、東は南太平洋、南はオーストラリア北部、北は八重山諸島までの範囲と考えられているが(大橋 1989)、インド洋やアフリカに産するものも同種と考えられ、それらは subsp. *quadrialata* (Baker) Verdcourt と区別されている (Smith 1985)。したがって、東南アジアや南太平洋のものは subsp. *gigantea* となる。日本列島におけるその種子の漂着は、自生地の八重山諸島では知られていたが (Nakanishi 1983)、それ以外ではほとんど知られていなかったもので、ここに記載しておく。筆者らの調査でこれまで、高知県四万十市平野で5個(松本)、和歌山県西牟婁郡白浜町北浜で1個(久保田)、新潟県佐渡市岩谷口で1個(中西・伊藤 2006) 鹿児島県熊毛郡屋久町安房で2個(中西 1992) を発見することができた(図1)。この漂着分布パターンは、モダマ類や他の南方系種子と同じであろうと思われる。すなわち太平洋側では関東地方南部まで、日本海側では能登半島、佐渡島あるいはさらに北まで漂着している可能性がある。今後、九州北部から能登半島、東海から関東地方南部での発見が期待される。

採集した漂着種子の大きさは、縦22.7~24.0mm、横24.8~27.4mm、厚さ9.8~12.9mmで、偏円形をしており、臍の幅1.4~1.9mmで、外周の約5分の4以上を占める(図2)。それぞれの測定値の平均と標準偏差を、これまで採集した八重山諸島のものと表1に示した。マン・ホイットニーのU検定の結果、両群の間にいずれの形質も有意差はなかった。色は朽ち葉色、茶色、焦茶色、濃赤茶色、黒色に近いものなど様々であり、まだら模様があるものなど変異が大きい。同属の他の種子と比べて、本種は臍の幅が細く、しばしばやや溝状にへこむ傾向がある。漂着種子の外見はいずれも生きていた状態であり、長期間生きてまま海水に浮かび、海流散布によって広がるものと考えられる。

日本本土におけるトピカズラ (*Mucuna*) 属植物の種子は、これまでイルカダ (ウヅルカダ、クズモダマ) (久保田ほか 2004) *M. macrocarpa* Wall., カシヨウクズマメ (ハネミノモダマ) *M. membranacea* Hayata, *M. urens* (L.) Medikus が知られているが(中西 1999)、それ以外の種も漂着している可能性がある。

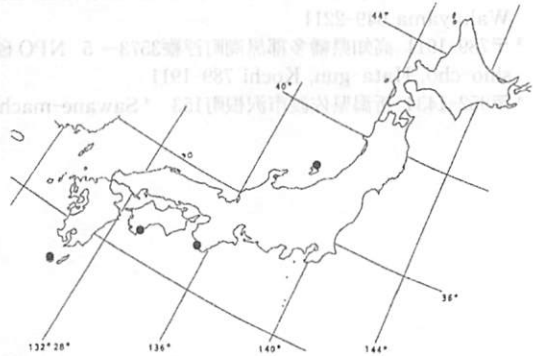


図1. 日本本土におけるワニグチモダマの種子の漂着地点。

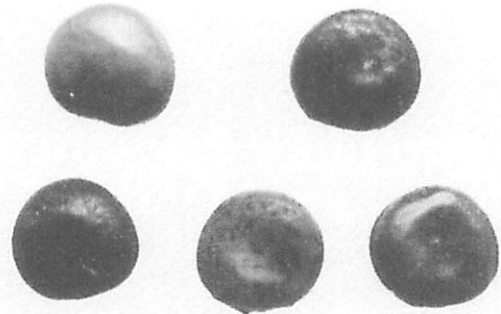


図2. ワニグチモダマの漂着種子(高知県採集)。

表1. ワニグチモダマの種子の大きさ(平均±標準偏差)の比較

	本土* (n=8)	八重山諸島 (n=11)	有意差
縦	23.2±0.5mm	22.8±1.6mm	n.s.
横	25.7±0.9	25.6±1.8	n.s.
厚さ	11.5±1.1	11.4±0.9	n.s.
臍幅	1.7±0.2	1.5±0.2	n.s.

\*佐渡島, 屋久島を含む

引用文献

- 久保田信・永益英敏・中西弘樹。2004。イルカング(マメ科)の本州への漂着初記録。南紀生物46(1):37-38。  
中西弘樹。1992。屋久島の漂着果実と種子。長崎女子短期大学紀要(16):25-30。  
Nakanishi, H. 1983 Drift fruits and seeds on the coast of the Yaeyama Islands, southernmost of Japan. Jour. Phytogeog. & Taxon. 31: 22-30。  
中西弘樹。1999。漂着物学入門。211pp., 平凡社, 東京。  
中西弘樹・伊藤正一。2006。佐渡ヶ島に漂着した熱帯のマメ科種子。どんぶらこ(18):2-3。  
大橋広好。1989。マメ科。佐竹義輔・原 寛・亙理俊次・富成忠夫(編)。日本の野生植物木本II。pp.253-272。平凡社, 東京。  
Smith, A.C. 1985 Flora Vitiensis Nova. A new Flora of Fiji. vol.3. 758pp., Pacific Tropical Botanical Garden., Lawai.

- 
- <sup>1</sup> 〒852-8521 長崎県長崎市文教町1-14 長崎大学教育学部生物学教室 <sup>1</sup> Biological Institute, Faculty of Education, Nagasaki University, 1-14, Bunkyo-machi, Nagasaki 852-8521  
<sup>2</sup> 〒649-2211 和歌山県白浜町459 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 <sup>2</sup> Seto Marine Biological Laboratory, Field Science Education and Research Center, Kyoto University, Shirahama, Nishimuro, Wakayama 649-2211  
<sup>3</sup> 〒789-1911 高知県幡多郡黒潮町浮瀬3573-5 NPO 砂浜美術館 <sup>3</sup> NPO Museum Beaches, 3573-5, Ukibuchi, Kuroshio-cho, Hata-gun, Kochi 789-1911  
<sup>4</sup> 〒952-1434 新潟県佐渡市沢根町153 <sup>4</sup> Sawane-machi 153, Sado City, Niigata 952-1434